

サンクチュアリ教会およびUCIを支持する人々の言説の誤り(10)

UCI(いわゆる「郭グループ」)は、日本で集会を行って「統一教会の分裂」という書籍を広めています。その書には誤訳やみ言改竄が散見し、真のお父様と真のお母様が分裂しているかのように論じています。前回に引き続き、UCIを支持する人々の言説の誤りを指摘していきます。

なお、これらの内容を総合的に理解し把握するためには、「真のお母様宣言」(http://trueparents.jp/)の掲載文や映像をごらんください。

教理研究院

注、真のお母様のみ言や「原理講論」等は「青い字」で、UCI側の主張は「茶色の字」で区別しています。

十一、UCIが主張する「重生論」の根本的な誤り

UCIを支持する人物が定義する「重生論」には、根本的な誤りがあります。彼らは、養子養女の立場である「実子ではない祝福家庭」が「父母様の実子」の位置に帰るには、真の父母の「実子である真の子女様」と一体となることだと主張します。そして、「実子である真の子女様」と一体となることで「真のお母様の胎中」と「真のお父様

の骨髄の中の種」と一つになることができるというのです。彼らは、重生で最も重要なのは「実子である真の子女様」と一体となることだと主張します。この言説は、真の父母による重生というのではなく、真の子女による重生とも呼ぶべき主張です。彼らは、その根拠として『訪韓修練会御言集』の「真の父母と重生」のみ言から、以下の部分を用います。

「これに、入ってくる時は左のほうから入ってくるのです。分かりましたか？ なぜ左のほうから入るかというかと、お母様が左のほうだからです。入ってきてお母様の腹の中に入ったとしても、その入った子供とお母様の根っこは何かというと、渋柿の根っこから切って取り返してきたものです。分かりますか？ それが天の家庭に入るには、手続きをしないといけないのです。何の手続きかということ、愛の手続きです。だから、真のお母様の腹の中に入っても、それは真のお父様の真の愛と真の血統にはまだつながっていないのです。お母様は真の愛と真の血統を持っていません。向こうのほうなのです。それは、新婦の立場で、新郎を迎えて一つとなることです。分かりましたか？ 分かりましたか？ (はい！) 全世界がここに入ってきて、

それからどうなるかというと、真の父母の夫婦関係によって、はらんだ子供、その者を、真のお父様の真の愛を中心に、真の子供の種を持ったお父様が愛の関係を結ぶことを、実感したあとに生まれたと同じようになるのです。そのような期間を通過しながら、お母様の腹の中に入った子供たちが、真の父の子供の種が真つ赤だったとするならば、愛の関係を繰り返すことによって、色が染められていくのです。ピンクからでもそうなったとすれば、真の父母の愛と真の子供の種と接ぎ木したという、つないだということになるのです。分かりますか？ こっちは本物で、こっちは偽物で、(先生がしぐさされる)兄さんと弟と同じです。分かりましたか？ そういうふうになつた状況をもって、それはずーっとこれを回って、母の腹の中を通して、先生の体を通し

て、再びお母様の腹を通していくのです。右のほうを通してです。『訪韓修練会御言集』185〜186ページ。注、太字と圏点は教理研究院による。以下、同じ)

供、その者を、真のお父様の真の愛を中心に、真の子供の種を持ったお父様が愛の関係を結ぶことを、実感したあとに生まれたと同じようになる」と語っておられます。どこまでも重生は「真の父母の夫婦関係」によって「お母様の腹を通していく」胎中における「血統転換」であって、彼らが言うような「実子でない祝福家庭」が「実子である真の子女様」と一体となつて真の母の胎中を通していくという「重生」などはありません。(ちなみに、「兄さんと弟と同じです」とあるのは、み言の続きを読めば分かりますが、「ハシダ付け」として、お父様と、祝福を受ける男性の関係を語っておられるものです)

ら、彼らが引用していない続きの部分で、以下述べておきます。(注、茶色の字までが、彼らが引用した部分)

それゆえ「天上、地上天国に、お母様と真の父母によって、入ることができる」と語っておられます。真のお父様のみ言から見ると、祝福家庭は「実子ではない祝福家庭」という観点ではなく、どこまでも「真の父母から出発した子女」の立場であって、真の父母によって、重生された祝福家庭は、神様の血統に転換された「実子の立場」であることが分かります。

真のお父様は、真の父母による重生とは「母の腹の中を通して、先生の体を通して、再びお母様の腹を通していく」と語っておられます。UCI側が主張するように、「実子である真の子女様」と一体となることで「真のお母様の胎中」と「真のお父様の骨髄の中の種」と一つになると語っておられるのではありません。重生とは、真の父母に接ぎ木されることです。事実、六五〇〇双以降の祝福は、真の子女が「真の母」の胎中に宿っておられたわけではありませ

彼らは、祝福家庭を「実子ではない祝福家庭」であり、「養子養女」の立場と定義しますが、そこにこそ「重生論」を混乱させる要因があります。これを整理するため、右記のみ言か

真のお父様は、ここで「再び生むことになるのだから、サタンの血統とは全然関係がない」と語られ、「真の父母から出発した子女の立場に立つ」ので、

「それは真のお父様の真の愛と真の血統にはまだつながっていないのです。お母様は真の愛と真の血統を持っていません」という一部を抜き出し、「お母様は墮落人間の血統である」と批

判する人物もいます。当連載の第9回で指摘したように、彼らは「血統」の概念を誤って捉える傾向があります。真のお父様が、「血統は夫婦が愛するその密室、奥の部屋で結ばれるのです。……精子と卵子が出合って生命体として結合するとき、血統が連結される」(『ファミリー』一九九五年三月号、22ページ)と語っておられるように、血統は父と母の二人でつながるものです。血統の連結は、父一人でも、母一人でも生じません。そのような理解に基づき、誤解が生じないよう補足すれば「お母様(お一人で)は真の愛と真の血統を持っていません」ということであって、「お母様は墮落人間の血統である」という意味ではありません。

「原理解論」「重生論」に「墮落した子女を……新たに生み直してくださるためには、真の父と共に、真の母がいなければならぬ」(264〜265ページ)とあるように、血統の連結や重生には、真の父と真の母のお二人が不可欠なのです。もし、「お母様は墮落人間の血統である」なら、父一人でお母様を生み変えたとも言うのでしょうか？ 分派の言説は、重生論と矛盾する非原理的な考え方です。十二、UCI側の「祝福権限の移譲」に対する歪曲したみ言解釈——真の父母様の「許諾」を得ない「祝福式」は無効である

UCIを支持する人物は、次のように教理研究院の見解を批判します。いま一度、彼らの言説を以下引用します。

「お父様は直系の長子、長孫へと祝福の権限を相続され、お父様の聖和後は、長子、長孫が真の父母様の名によって祝福が行っていくことを意図されていることが分かります。現在、お父様が祝福の権限を相続して下

さった「息子」とはどなたでしようか？」

「櫻井節子先生が顯進様を『直接的なお兄様』として大切に感じておられる」

UCI側の人物は、「お父様が祝福の権限を相続して下さった『息子』とは「顯進様」であると述べます。その根拠として以下のみ言を引用します。

「平面において、お父様の前に息子を立たせて祝福した、すなわちお父様が天上世界、霊界の息子の所に行つて祝福したのと同じ価値あるものとして、統一された祝福家庭として意味をもたせるために、お父様が息子に祝福の権限を相続してあげるのだということを知らなければなりません」(八大教材・教本『天聖經』1392ページ、三代大転換一休團統一祝福式。注・改訂第二版では1394ページ)

「この祝福を、天地の平面基

ことができ、そのような時代に変わった」、それゆえ二〇〇〇年九月二十四日の「祝福移譲宣布式」で「お父様が祝福の権限を相続して下さった『息子』とは、「顯進様」であると思うことでしょうか。しかし、それは誤りです。

彼らが引用したみ言の部分だけをもってしては、祝福の権限に関して正しく理解するには不十分です。これを正しく理解するには、「祝福移譲宣布式」とは何だったのか？ 真のお父様は「祝福の権限」を誰に対して移譲しておられたのかを、み言で直接確認しておかなければなりません。

「二〇〇〇年九月二十四日、午前十一時三十分、韓国の天宙清平修練苑にある天城臨宮殿にて、第一次『三時代大転換四位基台入籍統一祝福式』に参加するために修練中であつた約四千名が参加する中、天上の興進様に真の父母様の祝福権を移譲する『祝福移譲宣布式』を挙行なさった」(471ページ、序文)

「霊界へ行くようになれば、父が兄になり、息子が弟になるというそのような原則から、天上世界に行つた息子が父の前に来て、息子になると同時に弟の立場にも立つのです。両面の価値を連結させて一休團をつくつて一つにするのです。

「平面において、お父様の前に息子を立たせて祝福した、すなわちお父様が天上世界、霊界の息子の所に行つて祝福したのと同じ価値あるものとして、統一された祝福家庭として意味をもたせるために、お父様が息子に祝福の権限を相続してあげるのだということを知らなければなりません」(八大教材・教本『天聖經』1392ページ、三代大転換一休團統一祝福式。注・改訂第二版では1394ページ)

「この祝福を、天地の平面基

「先生が伝授式祝福をしてあげなければなりません。先生が行つた権限、また興進君が行つた権限、弟が行うことのできる権限もすべて興進君を通じて……、神様の許しを得て、真の父母の許しを得ることによって」(478ページ)

「祝福移譲宣布式」とは『主要儀式と宣布式IV』の序文にあるように、あくまでも「天上の興進様に真の父母様の祝福権を

移譲」された宣布式です。

真のお父様は「お父様が老いて死んだとしても、兄さんたちが祝福してあげられる」と語っておられるのであって、顯進様に「祝福権を移譲した」とは語っておられず、むしろ「お兄さんたち」という複数形で語っておられることに注目しなければなりません。しかも、「今後、興進君が祝福するのですが……。興進君がいなくなれば、顯進君がお父様の代わりに祝福をしてあげることができると述べておられます。ここで「興進君がいなくなれば」そのとき「顯進君が……」と語っておられ、顯進君に対する祝福権の移譲については、まだ起こっていないことであり、しかも「条件付き」で述べておられます。

そればかりか、「先生が行った権限、また興進君が行った権限、弟が行うことのできる権限もすべて興進君を通じて……、神様の許しを得て、真の父母の許しを得ることによって」と語っておられる内容から見れば、顯進君への祝福権の移譲は、どこまでも「興進君を通じて、神様の許しを得て、真の父母の許しを得ること」によってなされるというのが大前提であることが分かります。

結婚を受けることが、正に真のオリブの木に接ぎ木される恩賜です。……真の父母様が許諾された聖酒式を通して血統転換をし……真の家庭を探し立てられる道が大きく開かれました」(『平和神経』34〜40ページ)と語っておられるように、真のお父様の「許諾」を得ない祝福式は意味のない儀式であり、無効である事実を知らなければなりません。

以上の真のお父様のみ言を読めば、すでに後継に関する「秩序」が明確に語られています。まず、「先生が霊界に行くようになればお母様が責任を持つ」ということであり、その次には「息子・娘」ということです。注目すべき点は「息子がいなければ、娘がいなければなりません」と語っておられる点です。このように、お父様は相続者としての「後継」の秩序を、はっきり述べておられます。

「今(世界平和統一家庭連合時代)は本然の母親が、長子権復帰と父母権復帰をして、母親復帰圏に入ったので、母親を中心として見るとき、長子と次子は母親の名のもとに絶対服従しなければなりません。服従するようにすれば父と連結します」(『主要儀式と宣布式Ⅲ』151ページ)

このように、子女であるカイン・アベルは「真の母」を通じて「真の父」に連結されなければなりません。この原則は、祝福家庭にも当てはまるもので、真のお父様は「お母様を中心としてカイン(祝福家庭)・アベル(真の子女)が一つにならなければなりません。お母様と一つにならねばならないのです。そうしてこそ先生と一つになるのです。霊界もそうであり、地上もそうです。先生と、神様と、です」(マル

スム選集、265-310)と語っておられます。顯進君の場合、「真の母」を通じて「真の父」に連結される原則から外れたため、真のお父様はその活動をお受けになることができませんでした。しかし、真のお母様のもとを去る前の七男の亨進様は、自分の活動を真のお母様に報告し、「真の母」を通じて「真の父」に連結されていたため、お父様はその活動を祝福しておられたのです。

前述したみ言どおり、真のお父様のご聖和以降の相続者については、「お母様の前に一番近い息子・娘が第三の教主になる」という事実を、私たちは明確に知っておかなければならないでしょう。

したがって、真の子女様の中から「第三の教主」である相続者を選んでいく権限は、どこまでも真のお母様にあるのであって、それは真のお父様のみ言どおり、お母様の前に一番近い子女様ということになります。このように見たとき、真のお父様の「祝福権限の移譲」の問題に関しても「神様の許しを得て、真の父母の許しを得る」立場において、現時点では、文善進世界会長が立っておられるのであり、真の父母様の子供の種を持っておられる女性の真の子女様として、今後においても、真の父母様の代身として祝福式の主礼を行うことができる立場